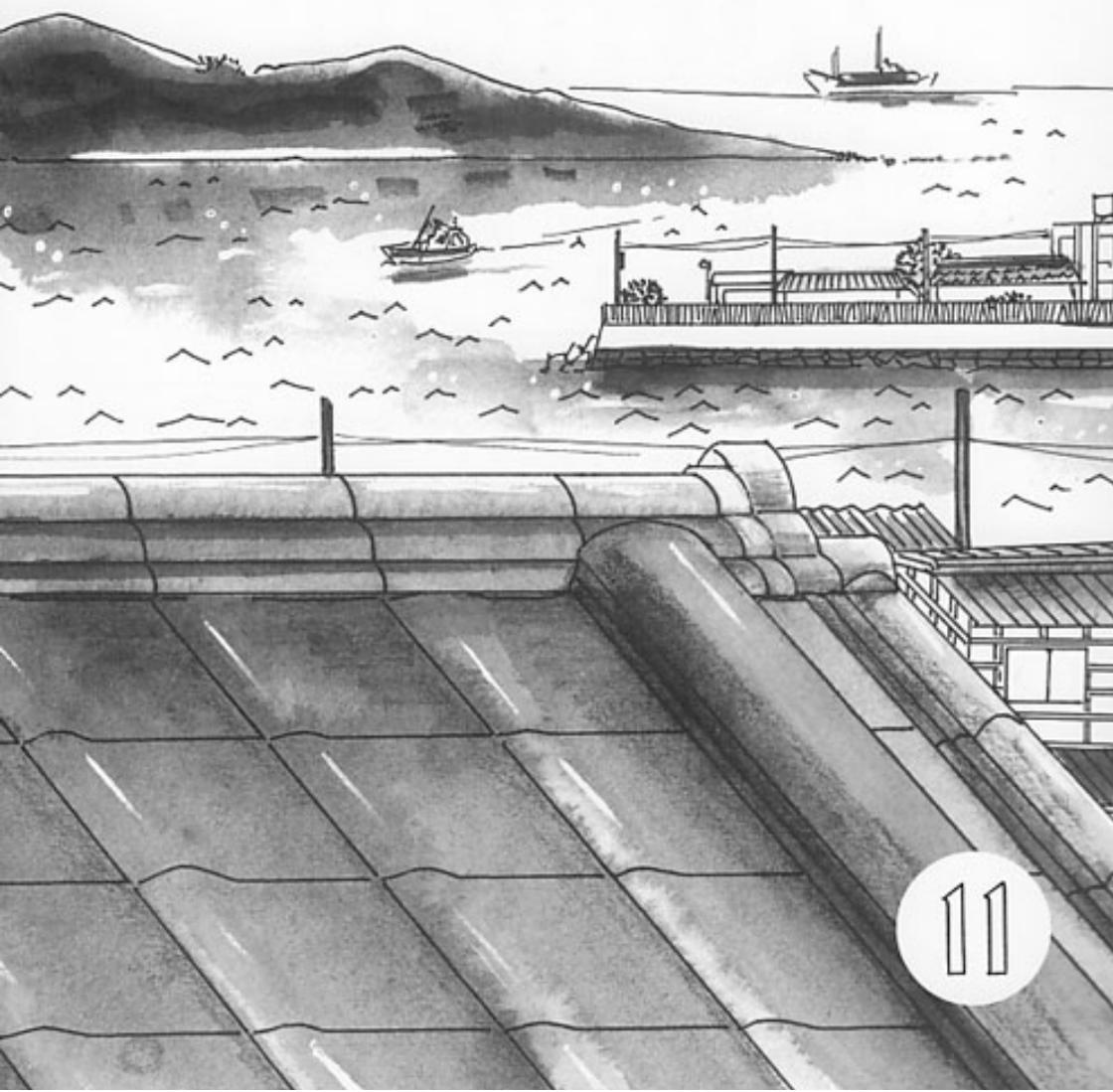


令和2年11月5日発行(毎月5日1回発行)
第60巻11月号(通巻736号)

風土



栗飯を子が食ひ散らす散らさせよ

(句集『含羞』より昭和二十一年作)
この句には「久しぶりに米一日分を受配す。山の落栗を拾ひ来させて即ち」の前書があります。当時はまだ配給の時代です。桂郎師一家は町田に疎開したばかりで、ほとんど失職状態でした。当時の常食が「すいとん」の頃です。子供たちの好きな栗飯を貴重な米で炊いたのです。我先に栗飯を掻きこみ散らす子等を母が叱りますが、「今日ぐらいいいではないか」とあたたかく見守っているのです。桂郎師の家族愛が滲み出ています。

食ひ物の中のなまあげ焼けば雪

(句集『含羞』より昭和二十三年作)
これも食べ物の句ですが、前回の「食ひ物の名は限りなしつゆの雨」の、桂郎師の好物の一つでしょう。生姜を搗り、醤油を用意し、これから「なまあげ」を焼くのです。もちろんコップに安酒も注いであります。おあつらえむきに雪がちらほら舞いだしました。熱々を頬張りつつ、雪見酒と洒落込むのです。

師の墓や十指をもつて落葉掻く

(句集『波の花』より平成十五年作)
桂郎師の墓は町田市の青柳寺にあります。街中ですが、木立に囲まれた静かな所です。この句の前に「日に進む二十九回桂郎忌」がありますから、お参りに来たのです。桂郎師の墓の近くには櫨の大樹があり、忌日の十一月六日の頃は落葉の季節です。墓の肩の落葉を「十指をもつて」はらうところに、桂郎師と直に話している器師を想像します。桂郎師を失ってからもう二十九年も経ってしまいました。

山ひとつあたたためてゐる冬すみれ

(句集『波の花』より平成十五年作)
この句は句集『波の花』の最後に置かれています。器師は「命二つ」の理念のもとに俳句世界を展開してきました、言い換えれば対象の命を輝かすために、その表現に執ってきたのです。「冬すみれ」という小さな命が、山全体をあたためているのです。なんと慈愛に満ちた世界でしょう。「命二つ」がそのまま具現化した白眉の作品と言えます。

朝顔棚

南うみを

灯の窓に羽虫ひしめく原爆忌
新涼の文机拭いて何も置かず
庭下駄に昼のぬくみやきりぎりす
貫入のかそかに朝の秋のこゑ
朝日子のあまねく触れて稲の花
抽んでて日をむさぼるは田の稗ぞ
荒草に鋏弾かるる秋暑かな
盆道の草やいささか虎刈りに
竹の根にやや浮く墓を洗ひけり
煮南瓜の全き角を魂棚へ
電柱の直立八月十五日
朝顔の棚より母の部屋のぞく



竹間集

同人作品



本島へ

内藤 静

おしろいや縁のあれば姉妹
盆僧の裾を短く足早に
墓石とわれに注ぎて秋日濃し
昏鍾を誘ふごとく法師蟬
新涼のチーズふつつ焦げて来し
萩刈つて明日よりの日々疑はず
本島へ船の出てゆくカンナかな

桐一葉

中村 洋子

つつしみて一と日を畳む白木槿
かなかなの鳴き止む空の残りけり
鹿ヶ谷かぼちやを祀る安楽寺
秋暑し出土の須恵のかけら干す
雷鳴の過ぐるを待ちて門火焚く
太鼓より始まる読経大施餓鬼
桐一葉己れ放下となりけり

空 蟬

土井ゆう子

風鈴をはづし寝につく老夫婦
原爆忌ただ夕空を眺めをり
空蟬よかなかなかなと鳴いてみよ
庭先に火薬の匂ひ夏の果
蕎麦の花風に攫はれ逝く木地師
ちよつと見てこんな所に毒茸
本丸の鴉に釣瓶落としかな

秋の風

森 高武

故郷の埃立つ道花木槿
「呉天氏の朝顔」と呼び咲き継げり
沖の船見えず残暑の砂の焼け
秋暑し四阿あれば長居しぬ
ゆつくりと歩く速さに秋の蝶
折鶴の飛び立ちさうな秋の風
鉢のまま風船葛の飛ばされし

花カンナ

門伝史会

盆の月仰ぎて母の歳数へ
踏み出してただ炎天のあるばかり
身の奥に気怠さ残し秋に入る
ネックレス手早く外す残暑かな
桃啜る顎つきだして齧り付く
輪唱のかなかなの声杜深し
日照雨してものみな眩し花カンナ

秋に入る

浜 福恵

丹後に多き式部の塚や萩・芒
小式部の母恋ふ色や葛の花
桔梗やをどり自肅の城下町
川原撫子育てて母の年忌かな
初鴨や棚田に響くコンバイン
初鴨や満ち来る潮に揺さぶられ
漢字がかなへ崩るる雲や秋に入る

流れ星

鈴木石花

透き通るボーイソプラノ秋初め
十人の等分に苦慮西瓜切る
底紅や女流俳人百寿祝ぐ
峠越え温泉街の案山子祭
流れ星生くるものみな死に向かひ
蝸蛄鳴くや日々新葉を待つばかり
竹紙の写経軸掛く月天心

秋の風

山田 暢子

日盛りやわれには外出禁止令
蚊遣火やをんなはいつも火に仕ふ
夏落葉踏めば昔の音がする
化粧せぬ月日いつしか秋となり
サルビアを眺めて散歩引き返す
鰯雲橋のたもとで別れけり
振り向くや師の気配して秋の風

終戦日

岩木 茂

長梅雨のまた雨音の強くなる
終戦日真青な海の眠さかな
一湾の闇使ひ切る流れ星
夾竹桃くわつと殉難慰霊の日
月の舟のせて寄せ来る盆の波
舟長屋みな舟揚げて盆の月
しだれ萩桂郎・明史・器亡し

盆の月

小林 輝子

そこはかとなく灯りけり合歡の花
夕ひぐらし夫の喪明けの裏山に
行き合ひの風にささめく茗荷の葉
夕風の渡る芒の走り穂に
揚花火五発六発頭痛し
厄日前夫の百日忌を修す
木地小屋に夫の居さうや盆の月

吾亦紅

田中佐知子

豊年や丹後王国一望に
新藁や牛舎に分娩予定表
山門に入り秋蟬のにはかなる
秋水の橋を渡れば和紙の里
干し梅の日のぬくもりを返すなり
幸せの日々にてさみし吾亦紅
月光や瓦葺きなる舟長屋

山河集

同人作品



南うみを選

溥儀の書の皇帝然と桐一葉
輪をぬけて闇の親しき盆踊
花カンナ急ごしらへの隔離棟
カンナ燃ゆ語り継がれし「黒い雨」
やりとりはパソコンメール生身魂

岡本 尚子

帽子から帽子へ貰ふかぶと虫
遠泳の子ら一列に雲の峰
墓地まではだらだら坂や稲の花
新豆腐金平糖の角いくつ
なでしこや乾き切つたる水位標

渡辺 やや

子規庵の木戸に畳みて白日傘
寄せ豆腐木匙に掬ふ夜の秋
飴色のちちの匂ひの籐寝椅子

上村 葉子

旅の荷に忘れてならぬ捕虫網
涼新た砥石に微か窪みあり

仙田 孝子

梶の木の並木のつづく秋の旅
水撒いて地熱の返り浴びにけり
読み終へてしばし空ろや昼の虫
立秋や盛塩の木型売る店先
女郎花に添ふ男郎花万葉園

杉本薬子

反骨のくくらは師を恋ふ菊の酒
鳥兜子もくくらはも好き新酒酌む
狂ふてふ俳句あるべし葛の花
落蟬の風に吹かれて起き上がる
樹木葬桐一葉にて回向とす

第43回桂郎賞俳句部門入選

夏花摘

小原芙美子

峠田に夏花摘みある母子かな
夏安吾の画仙紙に墨滲みたる
風濡れて夏鶯のこゑばかり
登音にあぎとふ鯉や夏百日
霧霽れて朽木に捲くやいはがらみ
螢火のひとつはけもの道へ消え
振花のよぢれ而して人嫌ひ
議論さておき目の前のさくらんぼ
睡蓮を平らな風の吹くことよ
ゆるやかに着てゆふがほのあるじたり
鮎鮎の尾つぼの残る誕生日
捕虫網父にもたせて滑り台
キャンプ場は弾薬庫跡蒲の風
山羊の仔に小さき角あり月涼し
万緑やこげらは幹を走り上げ

八十八夜の水まんまんと取水堰
毛刈了ふ土に羊の尿の染み
剪毛羊かつゑしごとく草を食み
牝羊の乳の張りたる毛刈あと
父守るや長子田植機試運転
踏みあとの草起ち上がる代田べり
銅のごとひかる水田や天道花
下闇に濯ぐ女や脛濡らし
上がり框に問はず語りや新茶汲む
じやがたらの花抽んで吹かれをり
谿の水とぼしる際に蛇いちご
霊場の池面を分けて蛇の首
磴の百みどりがくれに菅笠来
巡礼の皓齒かがやく若葉風
階に六月の風あびてをり

第43回桂郎賞俳句部門佳作

霞が関界限

堅山 道助

署名簿のゲバラと逢へり原爆忌
秋 燕 桜 田 門 を 筋 交 に
雁 渡 る ペ ル ー へ 帰 る 大 使 可 可
継 承 や 大 内 山 に 秋 の 虹
星 月 夜 少 し 残 業 し て 帰 る
縄 飛 や 屋 上 檜 円 形 に 暮 れ
昇 進 も 昇 給 も な し 鮫 鱧 鍋
外 ツ 国 に 使 っ て 幾 年 木 の 葉 髪
山 眠 る 量 子 暗 号 首 都 を 走 す
厚 着 し て ゴ ロ ゴ ロ 瘦 せ た ソ ク ラ テ ス
六 法 に 万 の 罪 の 字 神 の 留 守
議 事 堂 を 仰 け 反 ら し た る 大 噓
少 女 等 に イ マ ジ ン 我 に 開 戦 日
外 套 の ま ま 奉 祝 の 列 に 佇 つ
生 涯 を 公 僕 と し て 去 年 今 年

初 鴉 霞 が 関 を ほ し い ま ま
両 耳 を 引 張 り 御 用 始 可 可
春 疾 風 ブ ラ イ ユ で 知 る 恩 師 の 訃
霾 る や 総 監 地 球 儀 を 回 す
訥 弁 の 離 任 ス ピ ー チ 鳥 帰 る
議 事 堂 を 灯 す 菜 の 花 明 り 可 可
官 邸 に 五 畳 の 茶 室 ク ロ ッ カ ス
守 衛 佇 つ 桜 吹 雪 の 外 務 省
春 の 雪 直 弼 終 の 日 の 如 く
醉 漢 を 担 ぐ 駅 長 桜 の 夜
地 下 街 の 出 口 を 叩 く 大 夕 立
手 を つ な ぐ 綾 子 と 朱 門 雲 の 峰
日 雷 樺 美 智 子 の 忌 な り け り
夏 雲 や 検 察 庁 に 人 動 く
ロ ル カ 詩 碑 炎 ゆ る ス ペ イ ン 大 使 館

第43回桂郎賞俳句部門佳作

寒 燈

石井美智子

童ら火振りかまくら振り合へり
かまくらの小さき神棚灯りけり
紋提灯大綱引を煽ぐかに
冬空へ紙風船の火影かな
日の光集め尽して冬木の芽
北緯四十度の鬼棲む岬寒夕焼
除雪車の地響き町の朝まだき
孫の名に我が名の一字毛糸編む
わらんべに紛る雪ん子櫓遊び
徳利はこけしの形雪もよひ
山の幸鍋にあふるる女正月
寒水に豆を浸すや夜のしじま
背をまるく豆選る嬬座寒燈下
峡住みに日の色恋し寒卵
ひとつ家に三代暮し七日粥

年玉に米一升をもらひけり
我が庵の紙窓のひと間初明り
振り翳す出刃の厚さやなもみはぎ
なまはげの荒ぶる声を聞きに来よ
燭を手に部屋の巡回年守る苑
餅搗に手拍子ありぬ介護
室の花さして明るき山家かな
裏山は鴉のねぐら冬至粥
となり合ふ本家別家に冬灯
はらからは同じ故郷根深汁
荒天や鱒来ると番屋の灯り
俎に余る白菜割りにけり
短日や子を待つ明り外に内に
色硝子灯る教会初時雨
朝市に縦の木売られ十二月

風土独語／南 うみを



溥儀の書の皇帝然と桐一葉

岡本 尚子

溥儀は清朝最後の皇帝で、辛亥革命で追われた後「満州国」の皇帝となりましたが、敗戦後ソ連や中国に捕われました。その波乱の人生は映画にもなりました。作者は捕らわれの身の溥儀の書を見て、その筆跡の「皇帝然と」したものに驚いたのです。「桐一葉」が、凋落の中にかくとした溥儀の生き方を伝えています。

蟬生まる森の緑を透かしつつ

原 博美

蟬の幼虫は七年の地中生活の後、木の幹や草の葉によじ登り羽化します。羽化の初めは白色で、やがて固有の色に変わっていきます。作者はその過程を「森の緑を透かし」と捉えました。森に生まれ、森に死ぬ蟬への愛しみが感じられます。

帽子から帽子へ貰ふかぶと虫

渡辺 やや

例えば「木の実」であれば、「手から手へ」となるフレーズですが、相手は「かぶと虫」です。捕らえた方も貰う方もちよっとおっかなびつくりです。そこで「帽子から帽子へ」となりました。

夏霧の湾一枚に走りけり

赤石 梨花

海の霧は気温と水温の差が大きい夏に発生しやすいです。この

句のポイント「走りけり」で、海霧がたちまち湾いっぱい広がる様子を言葉にしたものです。夏霧らしさが出ています。

寄せ豆腐木匙に掬ふ夜の秋

上村 葉子

「寄せ豆腐」は豆腐の固まりかけを、椀や桶に汲み取ってそのまま固まらせたものです。作者は「寄せ豆腐」を口に含みつつ、夜がすっきり秋らしくなったのを実感しています。「寄せ豆腐」と「夜の秋」がひびき合っています。

ラジオ体操臍を伸ばして日焼の子

谷田明日香

この「日焼の子」は半裸なのでしょう。臍がよく目立ちます。「ラジオ体操」で伸びをするたび臍も伸びるのです。「臍を伸ばして」で男の子の元気が伝わってきます。

読み終へてしばし空ろや昼の虫

仙田 孝子

この句は、読了した時の呆然とした心性を「しばし空ろや」と伝えていきます。現実に戻りきらぬ意識に、虫の音が聞こえてきます。「昼の虫」の静けさが、読了感の余韻を引き伸ばしています。

戦ひ待つ竹籠の軍鶏カンナ燃ゆ

奥田 茶々

これは闘鶏を待つ軍鶏の様子を描いたものです。闘鶏では眼がつぶれたり、血潮の噴き出る怪我はざらにあります。この軍鶏は静かに竹籠にうづくまっていますが、その闘志を「カンナ燃ゆ」で示しています。竹籠を開いたとたん、静から動への激しい戦いが始まるのです。

風土集



南うみを選

田を植えて眠りこけたる村ひとつ 宇治 渡辺 やや

水鏡崩して清水呑みにけり

不意打ちに倒れてみせて水鉄砲

草刈りや雨の匂ひに追はれつつ

お絞りにレモンの香り梅雨の明

枇杷たわわ明るき午後の雨しきり

南あじ 原 博美

十葉の匂ひ摘みたる雨上がり

朝焼けの音無きドラマ独り占め

蜘蛛の囀に今日また触れて乱れ髪

一筋の風通り抜け汗拭ふ

背から食ひ腹から食らふ串の鮎

いわき 新妻 洋子

参道へ導く灯白紫陽花

濃紫陽花触れて一夜の雨の落つ

薬師堂の山より滴る御薬水

自転車漕ぐ子に強き走り梅雨

蛭や源氏の闇と平家の闇 上尾 根岸 善行

くちなしのこの世の染みに触れはじむ

富士の風筑波の風や梅雨晴るる

太陽の芯は暗闇揚羽蝶

いんげんのグリーンカーテン窓から獲る

一面の紫陽花を過ぎ日本海 秋田 石井美智子

幼児の団扇の遊び切りもなし

畝まはる麦藁帽子だけ見えて

向日葵に太郎次郎と名付けをり

サイダー飲む爪に畑の土少し

夏草や缶蹴りちやんばら知らない子 千葉 上村 葉子

父の日やちの背丈は知らぬまま

サングラス赤きマニキュアつけやうか

ぐらつきし乳歯こはごは食む氷菓

雨を行き水無月を食む夏点前